

和田節定編輯

開明小說

春雨文庫

第四號

上

20

25

30

35

010190508264

A 448

松村春輔 閱
和田定節 編輯

開明

小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

春雨文庫 四編序

父乃恩おん了りょう 春雨文庫はるさめぶんこ 松村先生まつむらじやうせいの筆ひつ

意い行ぎやう生せいるる 二蓋ふた之の蓋が葉はをを重かさねぬぬ 今いま也や

四輯ししゅう乃なり後ご免めんをを待まちてて彼かの方かた中なか才さいでで 葉はをを

よよ以もつ浦うらにに磯いそ列れつ松まつ先せん唐たう崎さき乃なり高たか祿ろく

惠めぐをを受うけるる 夜よにに雨あめハハ四よ時じのの常とこ盤ばんにに

八背

48-7537

癒いひかくく膏こう出です部ぶ負おのの子こ代しろ見み出で

弄ろうひてて三さん保ほの羽は衣い小せう作者しやくしやがが葉は錦きん

硯えん子し流ながす任まか吉きちいい世よ又また相あ生い其その時とき留とどま

計しりり落お下くだるるとと昔むかしにに掩おさめめされれしし去い捕とら

大お人ひとがが健けん化けのの妙めう案あんヤヤンンヤヤののおお新しんとと侶りよ

偶ぐりり書ふ屋みやがが鼻はな音ね高たか砂さのの松しょうのの齧かひひ

文ぶん永えい守しうりり聖せい詔みこと書しよ花はな入いりり大お島しま名な乃の

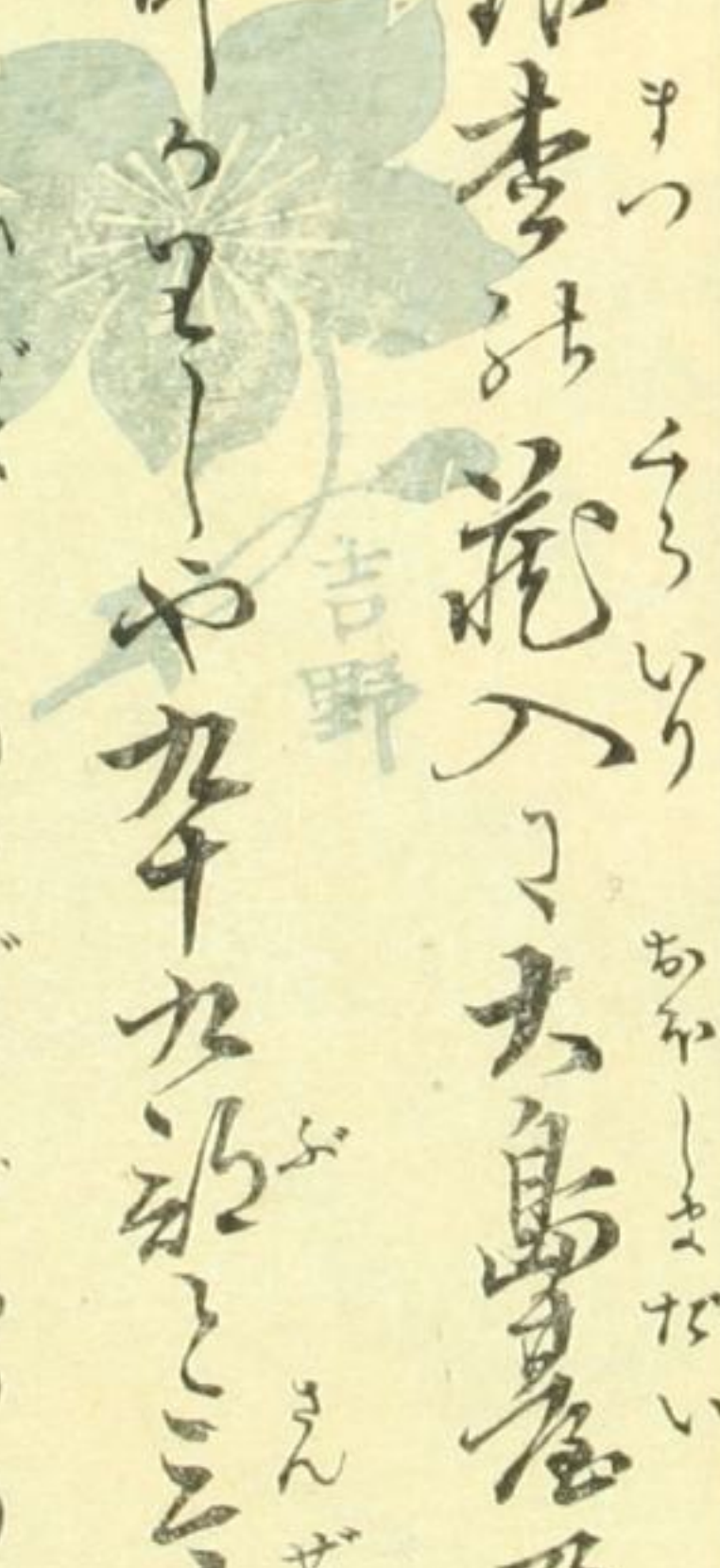
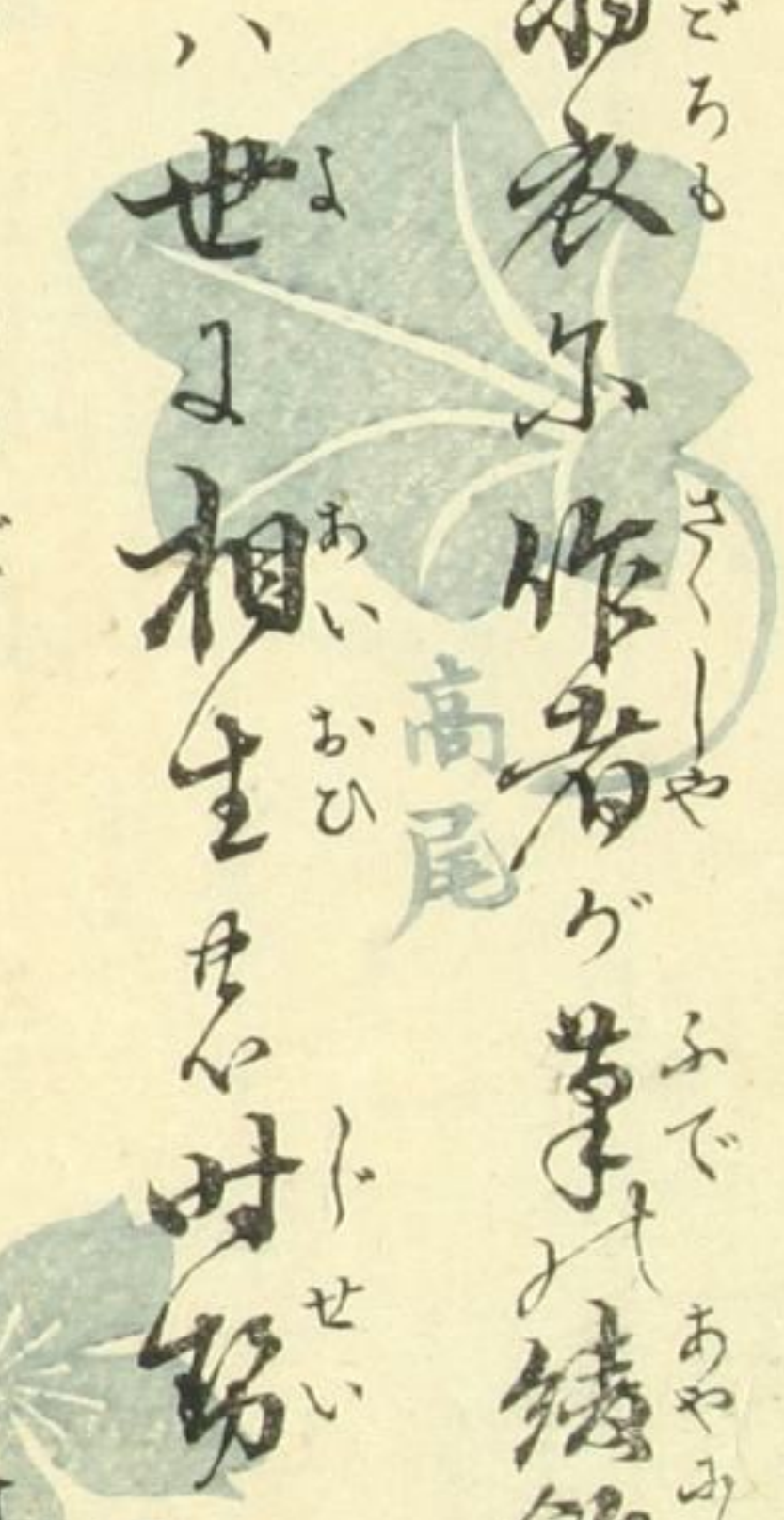
射しやすす境かうををくく百ひゃく部ぶううりり一いつやや卒そつ九く初しよととここ子しよ

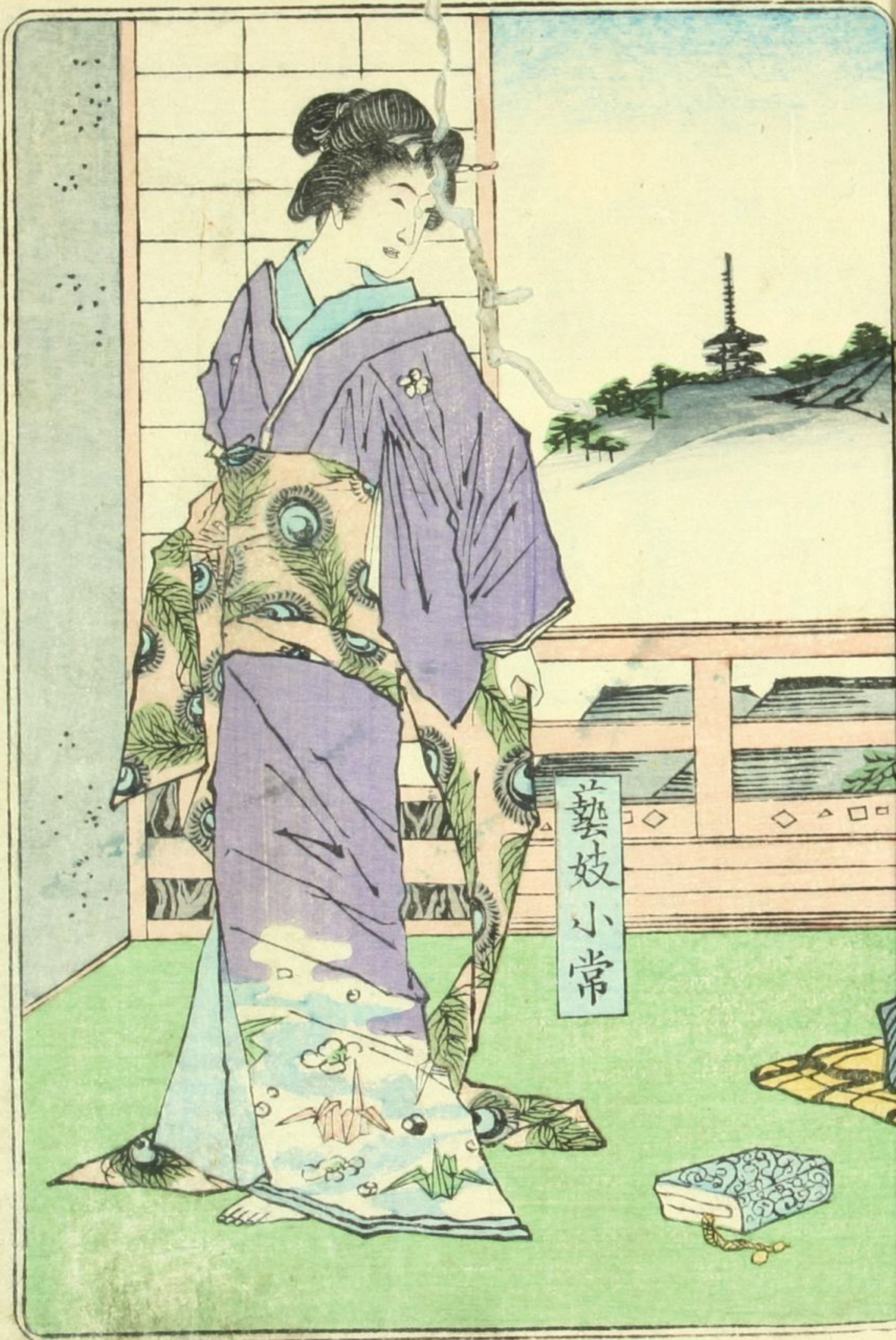
余よ丁てう乃の有あ良ら法はふ天てん日ひ毎まいにに陪はい隣りん五ご注ちゆ又また

只ただ管かんをを顧こ子し希きふふとと似にももせせぬぬ書しよ林りんががるる

色いろ遣つひひ音ね井い住す屋やののああははじじ

四し治じ十じゆ二に年ねん初しよ冬とうのの日ひ桂けい生せい述じゆつ





藝妓小常



横田清兵衛

解やすに
こまおの
海
春の雪
樂山



春雨文庫第四編卷之上

東京

和田定節著述

第十回

人の心も和らぎ一花の都の繁華の地彼藤村の
 妾宅の小常が許ふ今日もまると呑明一たる田原
 屋清兵衛常香と相手にうち戯むれ酒ふるつら
 るりりけりア、酔う今日の様ふ心持よく酔

とこの祿へ如何どうと小常こつね一ツ相あひと一ツ呉くれねへり
ハイお間あひを志まませうが其そのかおり此猪口このちよのこ
いの方うへ預あづりつて置おますヨ何故なんぜと一いるせと言い
て夕夜ゆふべりらの呑のつゞけで何程なんほど好するか酒さけでも夫それ
トやア身躰くわだふあとりますうらモウちつと酔よひと醒さま
して开そいてお飯まなまとお食あがりるをいまり清清ニ飯めいと食く
と情なさけねへと夜よいよるア此このうへ阪やが食くれるゆの
ウお飯まなまが否いやあう何なんでも外やよおまおんの好する物もの

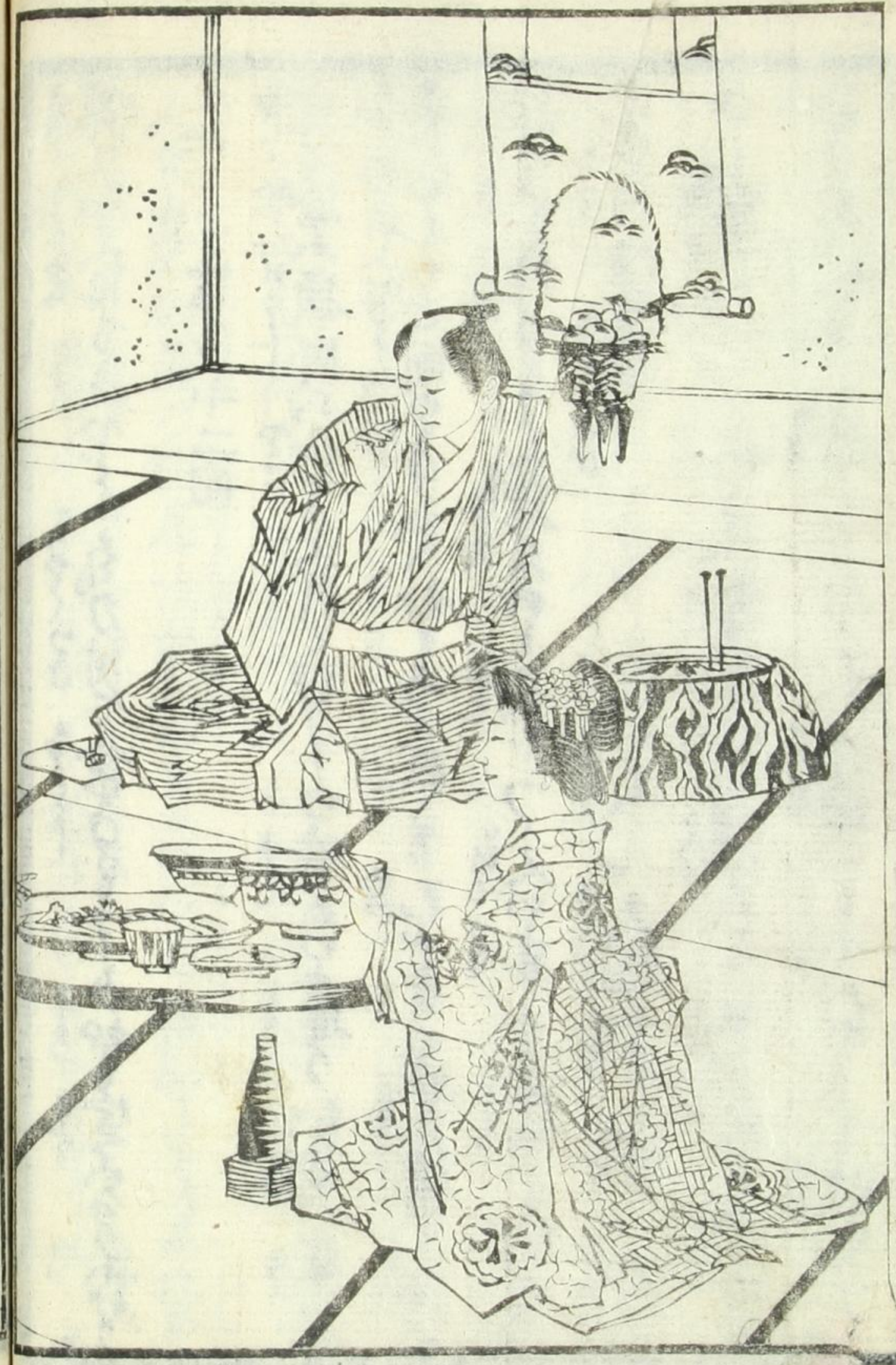
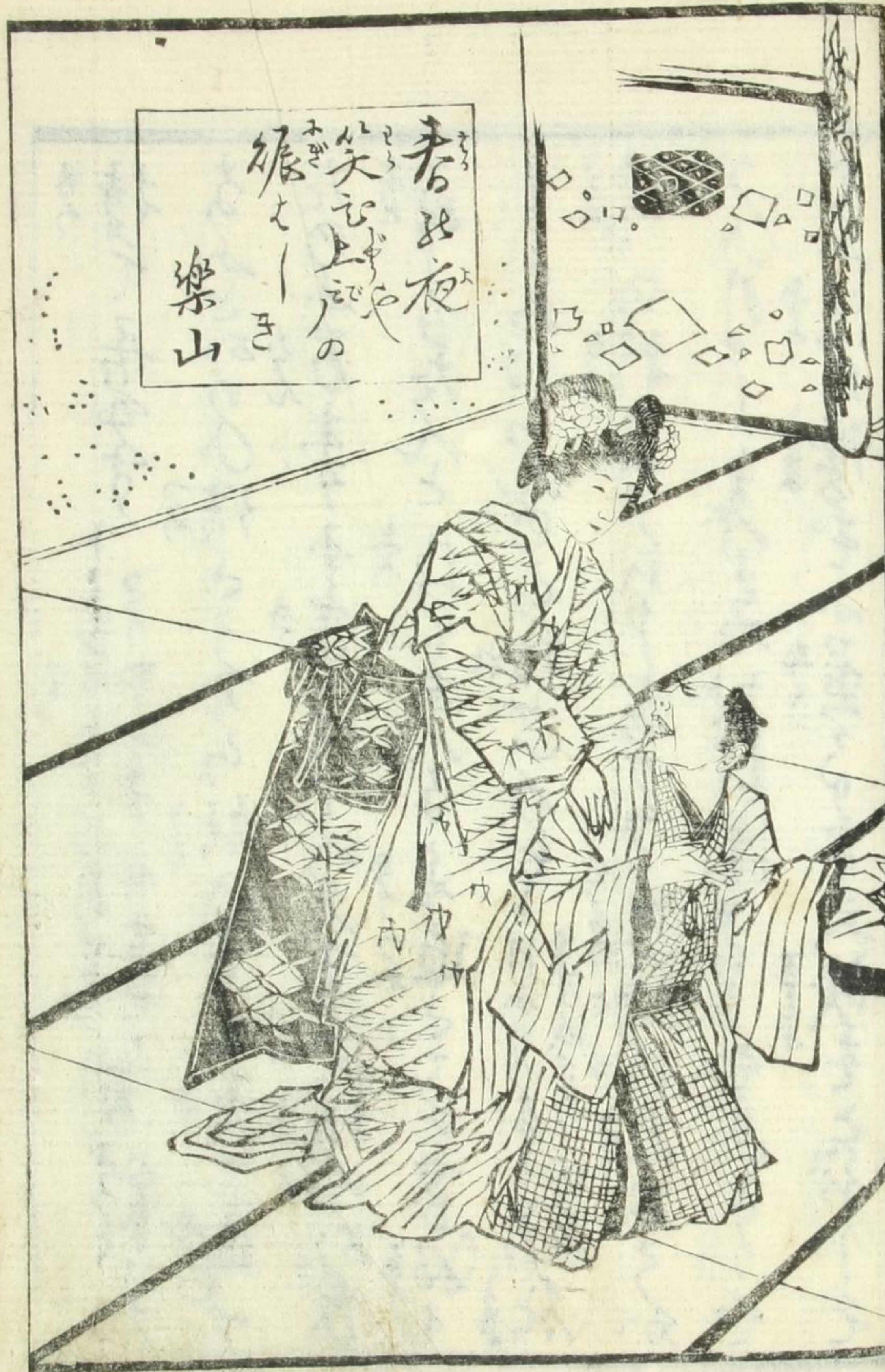
と進あげ申ますうら宜いものとお好このとみなをいまり一清巴おれの
好するものと言いと一い巴おれの好するゆのるら酒さけと小常こつね
ど一香何なんとやいる其酒そのさけが悪わるいおよううと余あまのゆめと
小常こつねさんがお言いのどおアホ清と一モウく飯めいへ真平まろびらと
何なんより小常こつねその猪口ちよくと鳥渡ちやうとく返かえして呉くれろ一いエ
かへりません是これと進あげると又またお酒さけと給ありまする
ら一清意地いぢのころい女子よんなとアよりく夫それるらべ己おれも
まうと和女達てまんとちの好するゆのを買かうて遣やらうマア酒さけを

呑のまいて呉くれろヨ小其様そのようふお言いひなさらるらずあえ随ま分まお酒さけ
と呑のまいて進あがまはなけが其替そのかへり私わたしいどもの好すきる者ものと
屹きつと度と買かうてお呉くれなさらるらへ清買かうてやるともく相違さうい
るく買かうて遣やるらる其猪そのちよく口くちとマア此方こつちへ小イいままささ
何なんも極きまるいらちこのちよく此猪このちよく口くちへ返かへりません常香つねかうさ
ん何なんと極きまるら宜よろらる香へ香左様さやうさねへ池洲いけしうの會かい
席せきも芳味ほうみるい小其様そのようるりのより何なんぞ珍めづらしい
りのりるいり香へ香夫それなら誰たれぞ太夫衆たゆうしゆうと呼よんで

一段いつたん聽きが宜よろらるら小江戸えどら登のぼつと藝者衆げいしやしゆうの藝げい
事ことが面白おもしろひくイヤ夫それより小四條南しじょうなんの芝居見物しばいけんぶつが
宜よろで香るいり香、其事そのことく小常こつねさん夫それふ極きまるら
よ小い小る小且かつ那なさん夫それあ小る小芝居見物しばいけんぶつと屹きつと度と也なり
る小い小お呉くれなさらるらへ清トヤア滅法めつぽう界かいと吐はき出だして
る宜よろいちつと散財さんさいどが翌日あすの終日しゆうじつ見物けんぶつさせやう
然しかし已おれの用事ようじが有あり小同伴どうはんよ小見物けんぶつの出来できるら小か
ら常香つねかうと常鶴つねづると爰こゝの家いへさんと誘引さそひあひ合外あひよ

誰ぞ男と連て行事とするがよい「嬉しひ」明
日の芝居の見倦とせねばならんこいゝ「ま」餘
まりをづんで常香さん俳優は見惚て機敷の階
子と落んやうに去るさんせ「あ」何卒己も早
く用事と片付て跡々行て見物いといが芝居
よりも此方の狂言ぶらう人目み掛らぬ招も可
「何」さ餘り人の込合ふ中の櫛笄と氣を付ろと
りて「ヨ」ト言紛らせど此頃の世間の噂は違はず

関東方の探索嚴しく既平野の同銘の諸司代
の手は捕縛され猶も同志の殘黨と分て穿
議と安桂村田へ同意せし田原屋清兵衛が家内
の様子探索方の付移へば油断のあらぬ時節
といひ同銘の士と窺うは量り長州の地へ落行
て去むし彼所ふ身と忍び好機會と得て手術ハ
あらしんと儲こそ有志の面々し心と合せて清兵
衛も俱は落行く心組小常の好と幸ひは明日



の芝居も最愛の名残と惜む別れ路の心むろ
りの賤別と知らぬ小常のいぢりく「且那夫
下へ毎度ゆく茶屋の南の江戸屋下でございませ
子「左様ともく江戸屋の古ひ懇意ど故粗末なと
の志まひくく江戸やうく性がよい己も用事の
暇さへ明はるさけ早く行つめりど夫りく連
てゆく男の誰よりたらし宜くうらうら馬幸の坐敷
下閑が有まいヲ、丁度のひ終屋の寅吉と呼よ遣

て連てゆけ「ホニ噂ふ陰とやう今終屋の寅さん
が下坐しきで声かーと常香さん鳥渡えて来く
お呉下まい「香「ふり香の氣も軽く下座敷へと
降り行跡み清兵衛の「小常み向ひ「狂言といふ者
の面白く仕組どりの下忠臣藏千本櫻其外世話
の道行りのと一々又筋立の替れと結局ところ
の忠信孝貞勸善懲惡と題めて入の教への早
學問其うちみも天神記の菅丞相道実公勤玉無

二の忠臣も朝廷と軽蔑する佞者の為は退けられ
遂に遠流しか成るさまと心のうち何様
よ口惜ひとや有らう昔も今も世の中は免角
佞人が跋扈し我意の權威と恣まに勿体
なくも天朝とあるがしるよするのそあるが精
忠の勤王者の根を断とり幕イヤでいある時平
の壓制虎の威とかる野狐ども憎しとも残念と
も言よも言れぬ的等が我恨夫よ付ても是迄に

心を尽し同志と暮かり古主へ忠告さされしも
却つて自身に害とあり思ひかけなく捕縛の身
と成るされと平野様イヤサ道実公土師の里に
は去姫君やうりやといふ姫もあり翌日の筑紫へ
流罪とある門出と悲しむ二段目の子別れ場の
和女も定ありんとてあらう丞相程のち方でも
恩愛別離の悲しこの我輩も同ト仁左エ門が
管丞相で花道の引込ハア、よろつとぞくと夫と言

ねと田原屋とつやが馴染なり重ねかさねー小常こつねとえとめ翌日あすの
妻子つまこの憂うれ別れわかれと思へば胸むねも張裂はりる涙なみだをかくす
咳せきむくひ折をりくらトシと階子段かゝ昇のぼりて爰こゝへ柵屋しほり
常香つねかと俱とも不連立つれが来きり寅吉とらきちのま一ま間まへ這入こゝへ
且かつ那な今日けふの只ただ今いまお宅たくへ参まゐり上ありますましましまらま且かつ那なの昨け
夜よ々々先斗町せんとうちやうにお駐ち輦りんと兼かり直ち様さま推お参まりまここき
げんげんを伺うかへんと思おもふ所ところへ常香つねかさんさんが何なにう有あ難がた
い用もち筋すぢと申まをすと注進ちゆうしん故ゆゑ早速さつそく参まゐ内うちいいしましましま

とト例れいの口くち々々出任でませまるまお髪かみの塵ちりと知しられけり
清兵衛せいべゑの完ま爾に一いつ宜所いどころへ来きて異ことと定さだめましま常香つねか
おおとらとらううが明日あした格別かくべつ用もちももるるけれれば四條しやうの南みなみ
と見物けんぶつお藝子えいこと遣やりてへと思おもふののどどが何分なんぶん女に
子こををりりととりり誤ごりり行ゆきき人ひと々々そこそこで貴公きこうと
宰領さいりやう不頼ふたのえてへととりりののどど一いつ只ただ今いま常香つねかさんさんから
兼かりり委細承知いさいしやうちいといとままししとシしテて且かつ那なののどど一いつ己おのれの
少すくし用もちが有あて何分なんぶん保合ほあせせが仕しみみくくひひうう都合つが

出来たら跡くくでも行て仕あうマア鬼
も角も万事貴公ふ取扱つて貫ひてへのど寅其
儀も承知いとしましと寅寅さんふ頼と申しまは
よ寅合点くハテ何事も宜つていのウト似ハハハ
夫の誰の似声とへ誰とて葉村屋の生うつ
第一声色はともあれ顔が我童延雀と搦交ありそ
若手の右團次と老功の多見藏と細末ありて衣に
掛ととり美男どのふ香ヲヤ其顔がう人小香ヲホ清

いつも相替らず能元氣で浦山いナ此頃ハ宜花
主でも見付とく寅トエモウふ得意どころでいひさ
いません毎日空然遊んでむりり居ますが然し
其うち又宜夏が有とらうと思ふのいよく合閑
東御上洛も近々と決定しと吐しと吐ま
たうら夫さへあれは随分まの懐中の工合が替
りまはく今く仕度若て置積り下むざい外
清清そんなる評判は違ひなくいよく御上洛も成



のうノ「マア左様いゝとでございます」ハテナアト
 何う心こころふ一ト思案幕府しあんまくふが上洛じやうらくある時ときハ益々ますます群
 る大小おのせう名関東なかんとうへ荷擔かたんする者多ものおほかるべけし
 勤王きんおうの武士ぶしハ皆深淵こゝろみ臨のぞむう如ごとき時ときる故片かた
 時ときも猶豫ちうよハ成なりがとと千々ちぢふ心こころと痛いたあ
 第十三回
 逢あふとの絶とぎしをきをるくみ人ひととも身みとも然さら
 ざらま一且邊つとま吉太郎きちたろうハ江戸えどへ往ゆきとる戻かへりが

け生麦なまむぎの松原まつがらみて外國人がいのくにんの捕えられ難儀なんぎして居ゐけ
お梅うめと計はかりらず助けたすけるより乳母めのとが家いに雨宿りあまやどり
幼稚ちひさなき時ときの友ともたると知り互あひに積つる古郷ふるさとの話はなしの夜よるの
雪ゆきあゝぬ茅わらが檐端のきむすと漏もる雨あめは濡ぬれて嬉うれしき夢ゆめの間まと
東雲とうぐも告つる鶏鐘とりかねの憎にくきとつゝと覚おぼえ初はじれど吉太郎きちたろうへ仕つかへ
の身故人目こゝろまひひとめと厭いとえは明あけぬうち別わかれしは立たち出でてその住すむ
家いへへ戻かへりしう斯かくてお梅うめへ吉田町きちだまちなる松まつ下亭したていに居ゐり
渡辺わたべ吉太郎きちたろうへ辨天べんてんの境内けいゐんの官宅くわんたくに在あれ志つと勤あの暇武いさまぶ

術じゆつの誓ちか古ふるの相間あひまふの松まつ下亭したていに來きり一酌いちしゃくを催もよほし忍しのび
くよお梅うめに逢あふお梅うめいと吉太郎きちたろう々く來きるとの朝あさ
る夕ゆふるふ待まちこびて深ふかき中なかつとの成なりしるる然されに
お梅うめへ今け日もまゝと吉太郎きちたろうが來きも為するると二階ふたかいの手て
摺すりみ身みと持もせ表おもてのかとと見て居ゐると後あと方はらうう後足おし
を徐そと來きる此家このいへの酌女しゃくおんなお松まつあり空然うつろひして居ゐるお
梅うめの肩かたへコツと言いひつ捕とらまるとお梅うめへ怖おそり「オ、
誰たれと祐人すけひと肝きまと潰つぶさせてサと振ふり返かへり「ア、お松まつさん

ぞ憎ら^んい^の覺えて^お在^松「オホ、一夫でもア、誰^れやらの
 句^も又^も志^とんと^と為^れを^又撞^つく^秋の鐘^と言^ふの^有と^あ
 が今^の春^のクア^とり^く半^日ぐ^らみ^顔と^見る^いと^言
 て^手摺^へ憑^れ弁^天の方^をかり^詠て^居る^こい^餘う^と
 と思^ふか^ら生^の付^く様^を為^て上^との^どり^オヤ^私が
 何^時弁^天の方^を詠^めて^居ま^しと^い言^ふ中^も横^に
 目^で東^{の方}へ^見當^とは^けて^居る^くせ^又何^時詠^めま^し
 じ^とも^いれ^いれ^んど^アレ^マア^彼と^りの^ラ憎^らい^の昨^日
 日^の話^す通^り且^邊さん^の吾^儂の^手習^の相^弟子^で
 組^やし^きど^から^別段^の心^安い^んど^と言^とら^れ林^へ
 松^へ一^つ手^習の^お師^通さん^どか^ら色^のいろ^はと^教え
 て^お世^貝ひ^のど^らう^一ま^ア澤^山持^んる^こと^を言^てお^い
 ち^めお^前の^事も^左様^言て^をる^くう^一何^どら^う腹^を
 の^中で^い請^賃と^出して^も恍^惚う^言ひ^とく^又言^れと
 く^思つて^お在^のく^せみ^偽せ^腹と^立て^きヨ^誰も^居る
 い^から^徐つと^彼の^人の^こと^を言^て上^るの^お不^知と^切

てサ憎らしいねへト言ふ時下と通りあゝる外國人
がふ梅とふ松と見て「貴嬢好べる有りますす水姓
ペケッ、」オヤあれハ此間來と百八番の商館のど子
梅「何ぞり吾儕又ヤアまど皆る同る、」やうる顔よ見
えて空然譯らるゝ「オヤ、今ノ異人で思ひ出と
實ハ夫とふ前をん又話す積りで二階へ上つて來と
忘れとんどヨ彼のの子それ生妻でふ前さんと捕えと
ト言てお話一の英の商館のチヤアポンの夫ッきり

此方へ來るゝと思つたら軍艦ふ乗りこんで薩六
へ合戦ふ往て去まつとのどッさオヤア嬉しい來ら
れたら何様おやうりト夫から以來毎日苦勞あいて
居とのどワ有り難い秘へ「真正ハ薩六へ往て豚ふ
食れても仕舞やア宜い彼様る氣障る異人ハ
いのどヨどがふ梅さんの為ハハチヤアポン異人大明神
どワ「オヤ何故ぞエ」夫でも彼の異人のチヤアポンハ捕
えられとく「且邊さんハお逢のどと言ふでハハハ

梅 それ 夫の左様どが且辺さんみお目の掛つとつてチヤ
アボン大明神でも無いぢやアあいのう松らんみチヤアボン
結ぶの神あ下有つと祓入梅アオヤ其様み人といぢあめると
兼知あまゐのワとまお松と捕えんと為るお松の遊る二
階あの下り口階子の段と上りて来るあ立派な姿の武
士二人お松の其尻腰と屈めあア出遊をせ此方のお
座敷が宜あうでございますト奥のあ一ト間へ案内すれ
お竹あが下から持上る茶煙草盆あの敷蒲あの續あの

て後あから盃洗あふ徳利あ盃あ一二種あの座あつきの肴あも出
けれあお二人の客あの盃あ採りお松あの酌あと為あせるあぐあ酒
と飲あまあつ話あすやうあ何あと雲田先生あ方今あの模様あと
如何あ思あしめす當あ港あるどみ居あてあの夫あ程あみあの存あぜね
が西京あの景況あであの迎あも無あ事あみあの濟あますあまあの實あふ
困あつあのりあのであ坐あるあ何あ様あ畑あ野あ君あのあ見あ込あその
如あくあ騒あ動あが起あらずあみあの居ありますあまあの如何あとあなれ
お世界あ万國あの景勢あの往昔あとあ變ありあと知あらすあ井

のうち蛙ふ齊しき諸藩の徒が只我が自國の規則の
と唱え攘夷の鎖港のと騒ぎとて日くみ拵の黨派
と集り當横濱港とも襲えんと為るの催し有る程
るれを京都の混雜の實ふお察しもうす相愛らず薩
長土がその先達するるのでは座いまれう一尺今の
ところでの長の勢ひが甚ど盛んで土人の暴行お
きふ次ぎ薩人の却て尊大ふかま人未確乎たる色
の現いさずと雖も其藩士のうち西郷吉之助中村半

次郎らの如き就中魁首とあり関東と倒さんと
為るの始計さうんの由りて九州の諸藩士これふ
煽動され京師ふ入り込と來り或ひの公卿の從臣と
暗殺しまた足利將軍の本像の首と斬り制し止
めんと為れども暴徒の黨多くして守護職所司
代とりくども漫り又手と下して是と做し難く因て
先刻もお話し申したる如く時田相模守殿と頭と
して京都見まはり組と言ふりのと彼の地ふおき

攘夷鎖送と唱へく世の中と強ぐは暴行の浪士輩
と捕えさせんとす然れども當今に至り劍槍を闌
たる士は所々の護衛に遣われ明手の者少く只この
地の金武場の江戸の講武場み次で劍槍を勝れよる
みの多しとす因て劍槍の教師に用おべきりの七
八輩と當港よりして是非とも貫ひ請け京地へ移
さねば禁庭の御警衛が備をり立ぬるり因て京師
へ微すべき人名のうち江戸の講武場み次於て牛若御

曹子と賞せられよる渡辺吉太郎のかねて頭相摸守
も講武場にて彼の教授と得て有る故年若とい
へども業前み於ては老練の者も及むざるを知り
なれを是非とも神奈川奉行より貫ひ請け連
れ来るべしとて泣坐るとの話に於て此方の坐しきみ
居るお梅の耳へ不斗をいりお梅の一日逢ぬさへ案
トて物の手は附ず彼処の空のそ詠め居ると若も
京都へ微り出され彼の地へお出よ成るやうな事よ



成なりとらどう何様なりせうおもト思おもへおもをおも胸むねまおもづおも夷やまきておもハおもツおもと
斗たりた又また逆上さかあさかがるさかとさか息飲いきのみをいきのみ込こんこどこ落おちつおちけおちておち隔へ
の方かたへかた摺すりりすりよりすりッすり猶なほそのその容子ゆるすとゆるす窺うかがぐうかがへうかがをうかが彼方あつち
のの二人ふたりののだだんだくく不迫せまるせま話はなのの高調子たかてうし否いや畑野君はたののくん
ののああみみせせででのの有あれれとと河承知かじょうちのの通とりり英えいのの軍艦薩ぐんかんさつ
州しゅう不迫せまりり彼のかの藩士はんしとと戦せん争そうみみ及およびびよりより江戸屋えどや
きあまま在あるる薩藩士さつはんしららがが當港とうこうのの異人館いじんくわんとと籠かごもんもんとと為な
るあのの風説ふうせつああるるののををままるるすす酒井左衛門尉殿さうゐさゑもんへへお

預あけあみみるるりり新微組しんちゆうぐみのの浪士らうしららがが居留地きゅうりうちへへ乱入らんにゅう
館くわんとと討うんとと為なるる催めいあるるとと現然げんぜんななれればば當港とうこうああてもも是これ
とと防まぐぐのの備そなへへ最まちちうう然しかるるとと折角せつかく集あつつ若者わかしよののうちうち
腕前うでまへ勝かれれ一いっ分ぶんとと京師けいしへへ抜出ぬきだされれててのの甚たままとと迷まいいりり殊ことふふ
渡辺わたべ吉太郎きちたろうららのの無なくく協あいいちちぬぬ當金武場とうきんぶちやうのの教授けうじゆ役やくこのこの
議ぎのの何分なんぶん請まひひきき難がた一いっ京きやう都ととと守まもるるもも當港とうこうとと守まもるるもも
詰つまりり日本にっぽんのの為ため徳川家とくがわがののたためめ急務きふむののかかとと專一せんいつととせせ
ねねをを成なららぬぬとと存ぞんととらられれるる一いっ実じつ又また汚けりりりりととももああるる

仰あやせらるまども今日こんにちのところで見まれを京師きやうしの景けい
況きやうの當港とうかうの如ごときりのみ非あらず既すでふ眉まゆ毛げへ火ひの附つきと
るるり天下てんかうの為ため徳川家とくがわの為ためと思おも召めささむ曲まげて相あ摸も
守まもの意いは従したがひ給たまへと説とれても猶なほ返へん辞じせぬ折よから
又またも一ひと群ぐんの客きやくが階か子こと上あり来きり隣りんり座ざ一ひときへどや
違ちが入れを兩上りやうじやうへ忽たちまち地ち声こゑと竊ひそめ餘よの雜ざ談だんよぞ移うつり
ける此方こゝの一ひと間まみ身みと竊ひそめ耳みみと澄すまして呷あき居ゐるか梅うめの
帯おび又また狹えさととら手てみ胸むねささきの痛いたとと押おへ衫かみふ願ねがひ入いるとく

啼なと溜息なげき吐つまぐり「渡辺わたべさんが今日けふの一度いちどもかええのせのや
何なに指さしととと案あんだられ煎餅せんべいの中なかの辻つじ占うらなと取とて足あらう逢あひ
見みての後のちの心こゝろよりうふれむ往むか昔むかしの物ものと思おもひざりり言いふ百
入首いりくびの歌うたがでてみんみ子安村こやすむらで渡辺わたべさんの乳母うぶとやらの
家うちへ降ふり込こめられ嬉うれしい爰こゝとお見みての後ののちのけし日ひよ
比くら較くられむ遇あいね往むか事ことの樂たのしきもそらつとけきと物もの
思おもふことも是これ不ふどみいへなつとと苛たげつと世よの
中なかとと思おもつと戀こひする身みふの誰たれしも同おなじんの

勝手で宜く當つて辻占と感心し居ると先刻
の當つと思ふこの嘘のよまの物おとひが湧て
出るの哉知らせと辻占ら夫は附ても渡辺さん
又遇ひといの今の話の容子で渡辺さんと
撰り入る京都へ連れて行き剣術の教授かとい為
やうと言ふので有らう撰られる程の人と彼様
と中又成との真事み嬉しいが藝と言ひ氣立と
言ひ男振りと言ひ吾侪が好む他も好く上方の女

ハ男と扱ふ上手とみれを京都へおいでの様み成
たら何様もやう無暗に附て往う否く外聞み
成る様も有つて悪いハテ何様も宜ら
うと思案み胸を痛むるとりう下でお松が大
聲とて「お梅さんお梅さん」

春雨文庫四編卷之上終

